

「退屈するものいろいろあります」

小学生の特に低学年で、授業中に立ち歩く子は少なくないかもしれません。おそらく、勉強が嫌いで退屈すると歩き出すんだらうなあ？なんて推測するかもしれません。退屈して歩き出すのは、間違いないのかもしれません。しかし、勉強が嫌いというのは、その通りとは限らないでしょう。今までお会いして聞いてみた経験では、嫌いというよりは、分からなくて退屈だという話があります。逆に、分かっていることを何回も言われて退屈するというのもありました。理解の早い子だと、理解できていない子のために、先生が同じことを繰り返していると、退屈してくるようです。また、たまたま立ち歩いたら、先生が自分に関わってくれたのが、心地よくて繰り返してしまう子もいるようです。他にもあるでしょう。

このように、同じ行動でも、その子によってその行動をとる状況は様々です。そこに耳を傾けることが支援の始まりです。状況が分かれば、対応が見つけられるかもしれません。分からなくて退屈な子には、分かるための支援を検討できるかもしれませんし、分からないままでも、授業に参加している実感を持てるような工夫ができるかもしれません。理解が早くて退屈する子には、答えを板書してもらおうなどのその子が好みそうな役割を作れないか検討できるかもしれません。関わりが心地よくて繰り返してしまうのなら、立ち歩いたときの心地良い関わりを、ちゃんと座っているときに提示できたら、座り続けられるかもしれません。

これは、授業中の立ち歩きだけではなく、様々な行動に関して当てはまるでしょう。困った行動が出てしまったり、好ましい行動が起こらないときには、その場面でその子の内外で何が起きているのかを、良い悪いの評価をせずに、率直に知ろうとすることが大切なのではないでしょうか。

